

役割形成に関する看護実践の体験の意味

国本 紘子・一色 康子*

The Effect of Experience in the Clinical Nursing with the Role-Playing

Hiroko KUNIMOTO and Yasuko ISSHIKI

概 要

学生－患者の相互作用の構造の中から「学生がまわらない」体験を、シンボリック相互作用論を基に筆者らで開発した方法を用いて、役割形成過程を検討する研究報告である。

キーワード：看護実践、シンボリック相互作用論、自我(自己)、役割形成、体験

I. はじめに

筆者らは先の研究で看護実践における学生－患者関係を2個の滑車をイメージし、学生の印象に深く残り、「気がかりとなったもの」は滑車を構成する歯であると捉え、学生－患者の相互作用の構造を明らかにした。

①「学生がまわらない」②「患者がまわらない」③「両者がまわらない」④「両者がまわっている」の4つのカテゴリーである¹⁾。

本研究は、学生が＜まわらない＞体験の意味を看護職の役割形成の観点から、質的研究・シンボリック相互作用論(ミード、ブルーマー、宝月等)の研究方法を援用し明らかにするものである。

研究目的

1) 学生－患者の相互作用の構造＜学生がまわらない＞体験の意味を、役割形成の観点から

明らかにする。

2) 看護役割形成の過程を明らかにする研究方法について検討する。

II. 役割形成について

役割概念を中心とした役割行動に関する役割理論の代表的なものは

①リントやパーソンズの集団の均衡や維持を中心テーマにしたもの

②G.H.ミードの立場に立つR.H.ターナーの象徴的(シンボリック)相互作用論によるもの

③T.R.サービンやT.M.ニューカムの集団の役割理論を展開するものである。²⁾

社会システムの観点から看護実践と役割形成を探究する上で、個人・自我(自己)を基盤にするシンボリック相互作用論は適切と考える。

1. シンボリック相互作用論の概要

船津³⁾、ブルーマー(訳)⁴⁾、宝月⁵⁾を基にその概要を述べる。

シンボリック相互作用論は＜シンボル＞(言葉、文字、身体運動、物等)を通じての人間の

*呉大学 Kure University

相互作用の過程に焦点を置いている。人間は言葉を中心とするシンボリックな相互作用を通じて、他者との関わりを持つ、いわゆる「社会的存在」となる。他方、＜シンボル＞を通じての相互作用過程において、人間は自我を形成しそれによって他者に働きかける存在となる、とする人間観の立場をとる。

シンボリック相互作用論で「自我」を形成するということは、人間が客観的事物や他者を対象とすること（社会的相互作用）ができること。そして、それだけではなく、「自分自身」をも自らを対象にすることができ「自分自身」を認識し、「自分自身」の観念を持ち、「自分自身」とコミュニケーションを行い、「自分自身」に対して行動すること（自分自身との相互作用）ができることをも意味している。

とりわけ1960年代以後の今日のシンボリック相互作用論は、社会的相互作用過程においてシンボルを通じて生み出される主体性、すなわち主体的「役割取得」によって形成される「自我」を基盤としている。「自分自身との相互作用」における「解釈過程」から生ずる、人間の主体性を明らかにしようとするものである。（船津衛，p19）

本研究では、宝月らの「シンボリック相互作用論による社会生活の分析枠組み」を援用する。

2. 看護実践と自我（自己）

哲学者ミルトン・メイヤロフ⁶⁾は、ケアの概念とは「比較的長い過程を経て発展しているような他者との関わり方であり、ケアをする人、ケアをされる人に生じる変化を基に、成長発達する関係をもつ言葉」であるとしている。

看護の中心的概念であり、看護実践の中で用いるケアリング・ケアの概念も、ケアをする人、ケアをされる人の自我（自己）の成長発達という意味において共通である。ケア・ケアリングの考え方を主軸にした看護理論には、ジーン・ワトソン、パトリシア・ベナーそしてドロセア・E・オレムの理論がある。

ワトソン⁷⁾はトランスパーソナルなケアリングの考えを発展させ、ケアを与える者とケアを受ける者の両者のヒューマンセンターに注意を

促すことを重視している。また、ベナー⁸⁾は看護はケアリングの実践であるとし、8つの援助役割を抽出している。そして、オレム⁹⁾はセルフケア不足看護理論で「看護エージェンシー」の概念を示し、看護実践する者の自我（自己）の在り方、成長は看護の質を異にすることを強調している。

筆者らが学生に期待する看護実践の体験は、看護をケアリングの実践と捉える、ケアリングの臨床看護実践の体験である。それはシンボリック相互作用論の重要概念である、「自己との相互作用」の体験でもある。

3. 看護実践の役割形成過程の分析枠組み

「シンボリック相互作用論による社会生活の分析枠組み（宝月）」（図1）を参考に看護の観点から改正を加え作成した。表1に分析とデータとの関連を示した。

使用する用語の定義を示す。

1) シンボル

人間関係における最も容易にして、最も直接的に観察可能な事実（ダンカン，1962）。シンボリックという語は統計的、並びに代表的という語と同一視できる。⁴⁾

2) 意味

シンボルを通じての人間の社会的相互作用から引き出され、そこから生じてくるもの（意味世界，図1）。

3) 自我（自己）

他者の態度を取得する事によって形成されるもの。客我（客体的自己）と主我（主体的自我）の2つの側面をもつ一つの過程。

4) 役割形成

他者の役割期待を認識し、選択的に推測し解釈を通じて、役割期待を修正し、役割を創造する役割形成の過程。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象：準学士課程にある3年次の実習（4月

～6月）体験の学生3名。

2. データ：学生が卒業研究時作成したプロセスレコード。

3. 分析：図1に示す相互作用遂行のメカニズムに従って分析(表1参照)、役割形成の過程を明らかにする。

IV. 分 析

事例1 (表2)

1. 状況定義

悲観的態度をとる患者にどう対応してよいか、困っている状況である

2. 自己との相互作用

(1) 表示過程

学生の捉える患者は次のようである。

＜昔と今の生活状況を比較し辛い状態にあり、私(学生)は答えを求められており、「休み時間」と答えを出す＞患者である。

(2) 解釈過程

学生の行為は次のようである。

＜ゆっくり休憩の時間を過ごすこと＞を患者に示している。

3. 一般化された他者の態度の習得

一つは、＜目を合わせ、聞く、さする＞は学生自身の身体(五感)を使う行動である。

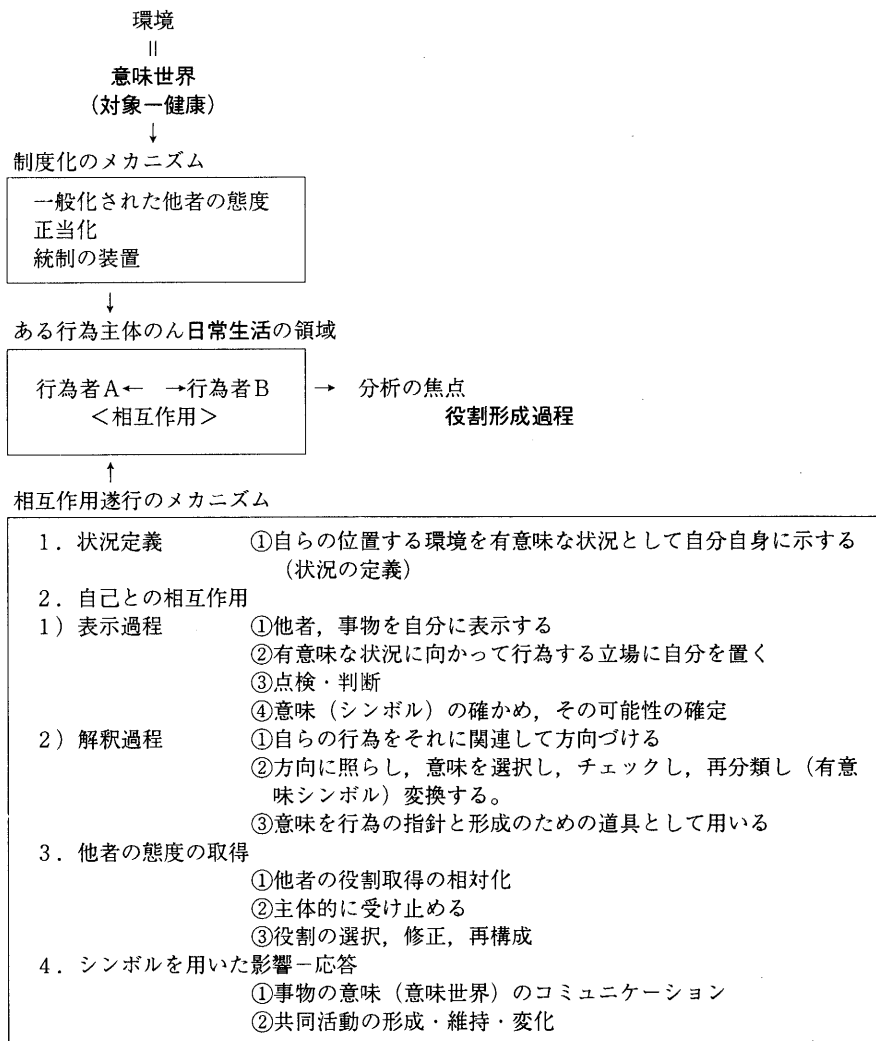


図1 看護実践の役割形成の分析枠組み(宝月)

* ゴシック体は筆者改正①～④の項目は筆者作成

表1 分析とデータ

相互作用遂行のメカニズム			分析対象としたデータ (プロセスレコード)
状況定義		①有意な状況として自分自身に指示	私が知覚したこと (以下A)
自己との相互作用	表示過程*	①他者、事物を自分に表示 ②行為する立場に自分を置く ③点検・判断 ④意味 (シンボル) と可能性の確定	私が感じ考えたこと (以下B)
	解釈過程**	①自らの行為の方向づけ ②方向に照らし、有意味シンボルへの変換 ③行為の指針と形成のための道具として使用	私が云ったり行ったり したこと (以下C)
一般化された他者の 態度の取得***		①他者の役割取得の相対化 ②主体的に受け止める ③役割の選択、修正、再構成	C
シンボルを用いた影響-応答		①事物の意味のコミュニケーション ②共同活動の形成・維持・変化	シンボル 患者A、学生はC

*「表示過程」とは事物や他者を自己に表示する過程。物事をその背景から解釈し、分離しそれを単なる刺激から「意味を付与されたものにする」過程。
筆者らは客我 (客体的自己) とし、その社会、文化の行動の基準 (他者の態度) を受け入れた自我と捉える。

**「解釈過程」とは意味の取り扱いの過程。
「解釈」とは表示過程で「意味付与」したもの (シンボル化) を自らおかれた状況や位置にあるいは、自己の関心にもとづいて意味づける (有意味シンボル) こと (船津)。
自分の状況や自分の行為の方向に照らして意味を選択し、チェックし、引き延ばし再分類し変容させること (ブルーナー)。
筆者らは客我 (客体的自己) に対応する主我 (主体的自我) の過程と捉える。

***「他者の態度の取得」とは看護という集団に属する行為者の態度。図1に示す環境、健康を対象とする看護者の一般化された態度と捉える。

表2 事例1

1. 状況定義	<ul style="list-style-type: none"> ・仰臥し、昔の話をする ・「元気な頃は忙しいことばかり考えていた ・○長したり人を世話する仕事をしていた」 ・「今じゃゆっくりしか考えられない」「今じゃこんなになって」 ・声を震わせる ・涙をため泣きそうな顔 ・左手で頭を抱える ・「こんなつらい休みは嫌です」 ・目をそらす 																										
2. 自己との相互作用 表示過程	<ul style="list-style-type: none"> ・昔の話になるな ・悲観の態度になったら困る ・今は1日の殆どをベットで過ごしている ・ああ困った今の状態が相当辛いな ・何か答えなくては ・元気な頃は忙しかったから ・今は休み時間と思ってもらう ・励ますつもりが、逆に一層辛いおもいになった ・この後どうしよう 																										
解釈過程	<ul style="list-style-type: none"> ・中腰で話を聞く ・「元気な頃は忙しかったんですね」 ・困り目をそらし、座り込む ・目を合わせ、健康な腕をさする ・「今は休憩ですよ、ゆっくりしてもいいですよ」 ・何も答えられず、左腕をさすり続ける 																										
3. 他者の態度の取得	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く ・目を合わせる ・さする (健側) ・「今までは忙しかった、今は休憩していいよ」 ・座り込む ・何もできない 																										
4. シンボルを用いた影響-応答	<table border="0"> <tr> <td></td><td>患者</td><td></td><td>学生</td></tr> <tr> <td>シンボル</td><td><こんなになった身体></td><td>—————</td><td><休憩時間です></td></tr> <tr> <td></td><td><ゆっくりしか考えられない></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td></td><td> </td><td></td><td></td></tr> <tr> <td></td><td><こんな休みは嫌></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>影響-応答</td><td>辛い思い増強</td><td>—————</td><td>何も答えられない</td></tr> </table>				患者		学生	シンボル	<こんなになった身体>	—————	<休憩時間です>		<ゆっくりしか考えられない>								<こんな休みは嫌>			影響-応答	辛い思い増強	—————	何も答えられない
	患者		学生																								
シンボル	<こんなになった身体>	—————	<休憩時間です>																								
	<ゆっくりしか考えられない>																										
	<こんな休みは嫌>																										
影響-応答	辛い思い増強	—————	何も答えられない																								

他方、＜時間をゆっくり過ごす＞関わり方は、＜声かけ＞の行動である。しかし、患者の辛さは増強しているようで、患者にとって＜不快な声かけ＞となっている。

4. シンボルを用いた影響－応答

患者の行動の意味(シンボル)は＜こんなになった身体、ゆっくりしか考えられない＞と過去を通して＜動かなくなった身体＞を強調し＜今の時＞を意味づけ(シンボル化)している。他方、学生は＜今は休み時間＞と、＜今という時＞を強調する意味づけ(シンボル化)である。学生はまわりたくても＜まわれない＞停滞の状況にある。

以上から学生の役割形成過程は、他者の生活史を通し、過去の時間・空間を想像し、今の時を意味づけ(シンボル化)する学習を要する段階にある。つまり、表1の解釈過程の②の過程である。

事例2 (表3)

1. 状況定義

コミュニケーションでやりとりが上手くいかない状況である。

2. 自己との相互作用

1) 表示過程

学生の捉える患者は＜懐かしい20歳にもどりたい＞患者である。

2) 解釈過程

学生の行動は＜患者に目を合わせ、質問に答える＞行動である。

3. 一般化された他者の態度の取得

「生まれていない」「そうだったんですか」等＜日常会話の交換＞である。

4. シンボルを用いた影響－応答

両者は＜懐かしい20歳の頃の生活＞についての思いは共通している。学生は関係のきっかけは捉えるが、行為者として＜まわり方が定まらない(あるいは定められない)＞状況にある。

以上から、役割形成過程は＜日常会話の交換＞を発展させる、行為者として意識する学習を要する段階にある。つまり、表1の表示過程②の行為する立場に自分を置く過程である。

表3 事例2

1. 状況定義	<p>I氏:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ S氏を避けている ・ S氏をにらみS氏にタバコを再度渡す ・ 「00年前に生まれてた?自分が20歳の時だ ・ 元気だった ・ M市で自転車に乗って友達と遊んだM市はいいところ <p>S氏:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ I氏に「タバコちょうだい」ともらう ・ 怖い感じで学生とI氏をにらむ ・ 学生とI氏の話聞いている
2. 自己との相互作用 表示過程	<p>I氏とS氏の相互関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ I氏はS氏を避けている ・ S氏は交流を持ちたいの・・・ ・ S氏は私がじゃま ・ I氏がタバコをあげるのはどうして?・・・ ・ 目で訴えている気がする <p>I氏と学生の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昔のこと懐かしいのか・・・ ・ 20歳にもどりたいのか・・・
解釈過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見ている ・ 「生まれてない」 ・ 「そうだったんですか」 ・ 「M市も変わりました」
3. 他者の態度の取得	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見ている ・ 「生まれていない」「そうだったんですか」「M市もかわりました」
4. シンボルを用いた影響－応答	
シンボル 影響－応答	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>患者</p> <p><20歳の頃の生活は楽しかった, 元気></p> <p> </p> <p><M市はいいところ></p> <p> </p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>学生</p> <p><懐かしい20歳に戻りたい></p> <p> </p> <p><M市も変わりました></p> <p> </p> </div> </div>

事例3 (表4)

1. 状況定義

医師が患者に治療に関する説明を行っている
場面で、看護者としての役割を果たせなかった
状況である。

2. 自己との相互作用

1) 表示過程

学生の捉える患者は次のようである。
＜手術し、気管をとり、声がでなくなり、生活
は変わる。ショックを受け落ち込み、考え込ん
でいる。放射線治療はがんばる＞患者である。

2) 解釈過程

学生の行動は＜患者と患者を取り巻く他患者、
医師に関心を示す＞行動である。

3. 一般化された他者の態度の取得

＜患者をとりまく他者(他患者・医師)に目差
しを向ける＞行動である。

4. シンボルを用いた影響一応答

学生の捉える意味(シンボル化)と患者の意味
(シンボル化)は同一である。相互に関係をもち
シンボルを交換する機会を生かし、＜自らをま
わす＞ことに躊躇している状況である。

以上から役割形成過程は学生の捉える意味
(シンボル化)を看護ケアの道具として使用し、
有意味シンボルに変換する学習を要する段階に
ある。つまり、表1の解釈過程の③シンボルを
道具として使う過程である。

V. 結 果

結果を表5に示す。

1. 学生が＜まわらない＞体験の意味

1) ＜まわらない＞学生の体験の意味を、自我
(自己)を軸に分析、3つの構造を抽出した。
＜まわり方が定まらない＞(事例2)、＜まわ
りたくともまわれない＞(事例1)、＜自らま
わらない＞(事例3)である。

表4 事例3

1. 状況定義	<p>医師：</p> <ul style="list-style-type: none">・放射線治療後、手術をする　・もし潰瘍が大きいままであれば食道の前の気管もとるようになる・口や鼻で息をする事ができなくなって、（喉の下をさして）ここに管をつけて息をするようになる・そうならないように、放射線をかけて小さくしていこうとしている <p>I氏：</p> <ul style="list-style-type: none">・ベット上に正座　・「先生と話すからちゃんとせんといけん」・咳、痰の出てくること、喉のつかえ感が強いことを話す・「どんな手術になりますか」「大きく取るとどんな風になりますか」・「こういうところから息をするようになる」（重い口調）　・「食べる物は・・・食べるもんは口から・・・（納得したよう）」・背を向けて横になる												
2. 自己との相互作用表示過程	<ul style="list-style-type: none">・そんなにきちんとしなくても　・そういうもんかな・一番気にしていることは痰のこと・手術するのだ　・気管をとる、大事だね、声も出んようになる。生活の仕方変わる・人の居るところで話すことではないのに・そんなに詳しく説明しなくても・・・手術になると決まっていけないのに・Iさん気にならないの・・・・ショックを受けているよう　・決まっていけないのだから落ち込まないで　・考え込まないで・今は放射線の治療がんばりましょうよ・声をかけるべきだろうが・・・向こうをむいているし・・・												
解釈過程	<ul style="list-style-type: none">・「そんなにかしこまらなくてもいいとおもいますよ」・医師を見る　・I氏を見る　・周りを見る　・何も言えない												
3. 他者の態度の取得	<ul style="list-style-type: none">・見る　・何も言えない												
4. シンボルを用いた影響－応答	<table><tr><td>シンボル</td><td>患者</td><td>学生</td></tr><tr><td></td><td><咳・痰・つかえ感強い><気管をとる大きな手術> = <痰を気にしている><気管をとる、声でない></td><td></td></tr><tr><td></td><td><息をするところが変わる></td><td><生活の仕方変わる></td></tr><tr><td>影響－応答</td><td><div>↓</div><ul style="list-style-type: none">・見ている</td><td><div>↓</div><ul style="list-style-type: none">・何もいえない</td></tr></table>	シンボル	患者	学生		<咳・痰・つかえ感強い><気管をとる大きな手術> = <痰を気にしている><気管をとる、声でない>			<息をするところが変わる>	<生活の仕方変わる>	影響－応答	<div>↓</div> <ul style="list-style-type: none">・見ている	<div>↓</div> <ul style="list-style-type: none">・何もいえない
シンボル	患者	学生											
	<咳・痰・つかえ感強い><気管をとる大きな手術> = <痰を気にしている><気管をとる、声でない>												
	<息をするところが変わる>	<生活の仕方変わる>											
影響－応答	<div>↓</div> <ul style="list-style-type: none">・見ている	<div>↓</div> <ul style="list-style-type: none">・何もいえない											

表 5 役割形成過程

<まわらない> 構造の意味										
	状況定義 ①	表示過程 ① ② ③ ④				解釈過程 ① ② ③			意味づけ (シンボル化) 患者-学生	一般的役割取得
<まわり方が定まらない> (事例 2)	—								?	・ 日常会話の交換
<まわろうにもまわれない> (事例 1)	—								> < 乖離	・ 看護者の身体 (5 感) を使った行動 ・ 不快な声かけ
<自らまわれない> (事例 3)	—								= (同一)	・ 眼差しを向ける

2) 役割形成過程からみると、次のようである。
<まわり方が定まらない>は、表示過程の②の過程にあり、客体的自己の形成過程にある。
<まわりたくともまわれない>、<自らまわれない>は主体的自我の形成過程にある。

3) 役割形成過程と一般的役割取得との関連主体的自我の形成過程にみる身体を活用 (5 感) する行動、目差しを向ける行動はケアリングの下位概念である。

以上の結果は 3 事例を対象としたものであり更なる事例検討を必要とする。

2. 看護役割形成の過程の研究方法について

1) 研究方法の有効性

筆者らはセルフケア不足看護理論を通して看護実践を検討してきた。この理論を理解する上での主要概念の一つに意図的行為の概念がある。意図的行為の概念はセルフケア行動、依存的ケア行動、看護行動すべてに関係している。自己との相互作用、意味の付与 (シンボル化) を焦点にする研究方法是意図的行為を明らかにする上においても有効であると考えている。

2) シンボリック相互作用論の方法論上の課題
デンジン (1970) の 7 つの原則を基に筆者らの操作を評価すると次のようである。

「人間の行為は過程的、動態的なものとして捉えること」については、過程として状況を把握することに努めた。次いで、研究者が用いる概念は「感受性概念であるべきこと」を重視した。さらに、「シンボルと相互作用を結びつけるこ

と」は、患者と学生のシンボルを両者のプロセス上で意味を付与することに努めた。そして、研究者は「行為者の見地をとる」こと。「行為者個人を集団の中に位置づけること、行為者自身の態度を社会集団の態度に結びつけること」に関しては、研究者自身看護職にあり、行為者自身の行動を看護職の態度に結びつけ分析した。

検討を要する原則は次のようである。

まず、人間行為の「状況化された側面」の取り扱い方について、特に①<状況の意味付与 (シンボル)>にかかる解釈の仕方②<相互作用にとられる時間>の扱い方である。

次いで、「研究者自身の行為がシンボリック相互作用という性格を有していること」である。

VI. おわりに

シンボリック相互作用論を基にした役割形成過程を明らかにする研究方法の取り組みはオレム看護理論の看護エージェンシー (看護婦の力) の概念を探求する上でも、有効に活用できると考えている。

<患者がまわらない><両者がまわらない><両者がまわっている>体験の事例を基に役割形成過程とその研究方法を明らかにしていきたい。

文 献

- 1) 倉鋪桂子, 長崎雅子, 国本紘子: 看護学生の臨床看護場面における患者-看護者関係-「卒業研究論文集」からの考察-島根県立看護短期大学紀要, 4, 65-73, 1999.

- 2) 岡堂哲雄編：社会心理用語事典，至文堂 1987.
- 3) 船津 衛：シンボリック相互作用論，1976.
- 4) ハーバート・ブルーマー：シンボリック相互作用論；パースペクティブと方法，勁草書房，1991.
- 5) 新 睦人，中野秀一郎編：社会学のあゆみ・パートⅡ・新しい社会学の展開・第Ⅱ部 相互作用論の展開，81～156，有斐閣新書，1997.
- 6) ミルトン・メイヤロフ：ケアの本質・生きることの意味，ゆみる出版，1988.
- 7) ジーン・ワトソン：ワトソン看護論；人間科学とヒューマンケア，医学書院，1992.
- 8) パトリシア・ベナー：ベナー看護論；達人ナースの卓越性とパワー，医学書院，1992.
- 9) ドロセアE. オレム／小野寺杜紀訳：オレム看護論－看護実践における基本的概念－，医学書院，1995.